

て報告した。症例は36歳の男性で初診時視力低下、視野欠損、眼球突出がみられ、視神経乳頭は萎縮していた。CTでは円形の等吸収域のmassで周囲が軽度enhanceされた。手術は経頭蓋硬膜外にアプローチし、腫瘍は被膜に包まれ表面は平滑で単一の嚢胞を持っていた。発生母地の神経は明らかでなかった。腫瘍細胞は紡錘形で一部柵上に配列している部分も認められた。ヘモジデリンの沈着している部分も認められ繊細な繊維網が存在した。S-100蛋白は多数の陽性細胞があり、GFAP染色は陰性であった。

眼窩内 neurinoma の中で嚢胞を持つこの症例は文献上非常に珍しいと思われた。

5. 緑内障モデルの可能性—Lapine glaucomaの1剖検例—

(実験動物中央施設, ¹眼科, ²糖尿病眼科)

上芝 秀博・金井 孝夫・植木キク子・
亀山 和子¹・堀 貞夫²・小山 生子

ウサギの緑内障の自然発症は、諸外国では多くの報告があるが、本邦ではその報告例は少ない。今回、本施設において本症に遭遇し、検索の機会を得たので報告する。【症例】日本白色種・雌。1988年2月茨城県より搬入、搬入時推定15週齢、体重2.45kg。【発症および経過】同年3月、眼球拡大および角膜混濁を発見。その後同症状が継続して観察されるが、他の一般症状に異常を認めず。同年12月、眼科学的検査で前房深度が増し、網膜が薄く、視神経乳頭の萎縮が見られた。1990年7月、眼圧値測定では右35.8mmHg、左13.1mmHgであった。その後、病理学的検索を行なった。【病理所見】肉眼所見：眼球の拡大、角膜の混濁、前房深度の増加が左右にみられた(左<右)。組織所見：顕著な変化は右側眼球の隅角線維柱帯の欠如、角膜実質部膠原線維の配列異常、デスメ膜の断裂など眼房水排出障害とその影響と思われる変化が確認された。

6. アデノウイルス12型誘発網膜腫瘍の遺伝子発現 (第1病理) 小林 慎雄

Adenovirus 12型で網膜に誘発された腫瘍の遺伝子異常について検討した。F344系ラット新生仔の硝子体腔内に10⁸PFUに濃縮したウイルス液0.005mlを注入し、31~288日後、ほぼ50%の動物に誘発できた。腫瘍組織の形態は、不完全ロゼットをつくる未分化神経性腫瘍で、ヒト網膜芽細胞腫に類似していた。腫瘍組織から抽出したDNAのSouthern blot hybridizationでは、AdenovirusのE1A断片が認められ、宿主細胞核酸へのウイルスゲノムの組み込みが確認され、in

situ hybridizationでも網膜組織にE1A mRNAの発現がみられた。ヒトRb遺伝子(H3-8)cDNAをプローブとすると全てに発現が観察できた。Bernardらは、ヒト以外の脊椎動物にヒトRb遺伝子類似の遺伝子が存在してマウスにおいてはDNAレベルで84%の相同性があると報告している。我々の結果は、マウスと進化系統の近縁にあるラットにもヒトRb遺伝子類似の機能遺伝子の存在を示唆するものである。

7. 耳下腺 sialosis の組織学的検討

(耳鼻咽喉科) 吉原 俊雄・森田 恵・
鍋島みどり・石井 哲夫

Sialosis(唾液腺症)は非炎症性、非腫瘍性に両側唾液腺、特に耳下腺腫脹を呈する疾患群の総称である。これまで降圧剤の連用、アルコール中毒、糖尿病等の代謝障害、性ホルモンの機能不全、自律神経疾患など多くの原因が報告されている。今回は最近経験した6例につき検討した。6例のうち5例は44歳から71歳の男性で、3例は高血圧のうち1例は糖尿病を有し、女性の1例はジギタリス剤を連用していた。

耳下腺生検による組織像は正常耳下腺の腺房に比べ腫大しており顆粒は一般に淡染し明るく抜けてみえた。電顕的に4例は正常耳下腺の二相性分泌顆粒は認められず電子密度は低く均一であった。PAM染色では正常の二相性顆粒では辺縁が染まり、唾液腺症のそれは全体にdiffuseに染色された。本疾患は自律神経終末の変性が成因として考えられているが、今回の観察では神経終末にはsynaptic vesicleを含み形態的に正常なものが多く認められた。

8. 耳介肉腫の1例

(耳鼻咽喉科, ¹病院病理)

森田 恵・吉原 俊雄・
石井哲夫・相羽 元彦¹

耳介に発生する悪性腫瘍のうち肉腫は極めて稀とされているが、病理診断が困難であった耳介肉腫の1例について免疫組織学および電顕的検索を行ったので報告した。

症例は20歳の男性で、耳介腫瘍を主訴に近病院を受診し、肉腫の病理診断を受けたため当科へ紹介され肉腫摘出術を行った。H.E.染色により細胞質の豊かな紡錘型細胞を呈した。ケラチン・デスミン・muscle actin S-100蛋白・Factor VIII・ α -リゾチームは陰性であったが、ビメンチンは陽性に染色された。 α -antitrypsin・ α -antichymotrypsinは陽性疑いであった。電顕所見では、マイトコンドリアが著明であり細胞内にはmulti